

早稲田大学 正員 堀井健一郎
早稲田大学大学院 学生員 工修 〇川原 睦人

1. 緒言

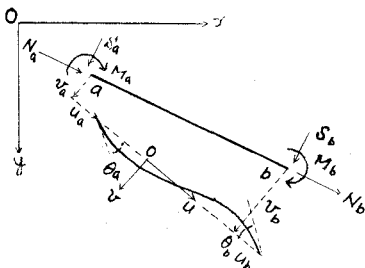
骨組構造に対して、変形の影響を考慮に入れた解法は、吊橋、アーチ橋等に対して、いわゆる“撓度理論”として発達して来た。

Saafan は、任意形状をもつ平面構造に対して、変形を考慮した解法について Newton-Rapson の法を拡張して、解を求める方法と提案している。藤野 勉、大坂恵二氏は、任意形状をもつ平面構造について、変形前の状態を考えた条件式を用いて、くり返し試算により、変形後の状態を推定する方法を提案した。又、Przemienicki は、歪と変位との関係に対して、有限変位の関係式を用いて、平面構造物の解法を作成している。

周知のごとく、骨組構造物を解析するためには、変形条件式、つりあい条件式、適合条件式の3個の連立方程式系を立てるにいわけである。変形条件式を変形後の状態で考えることは、構造を構成する部材自身が大きい変形を示すために起る諸現象を考察することである。これに対して、つりあい条件式、及び適合条件式を変形後の状態で考えることは、構造物が変形することによって起る形状の変化が、骨組構造の部材力、変形にどのように影響するかを考察することであると言える。このような問題に対しては、くり返し試算によって解を求める必要はないが、その過程に電算機による計算が有利になるように解式を変形しておく必要があり、又、先行荷重状態に対して、あらたに載荷される荷重が小さい場合には、線型化することが考えられるが、このようなことが可能になるように解式を作成した。

2. 解析方法

① 変形条件式



部材座標系 $O-uvw$ の系に関する変形条件式は、一般に用いられている如く、重ね合わせが可能であるとす。

ある基本となる荷重状態を考え、このときの部材力、部材端変位をあらわすベクトルを a 端、 b 端それぞれに $U_a^d, U_b^d, U_a^s, U_b^s$ であらわせば、次の関係が成立する。

$$\begin{bmatrix} U_a^d \\ U_b^d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_{aa} & k_{ab} \\ k_{ba} & k_{bb} \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} U_a^s \\ U_b^s \end{bmatrix} \quad \text{----- 1.}$$

$$\begin{bmatrix} U_a \\ U_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} N_a \\ S_a \\ M_a \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} U_b \\ U_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} N_b \\ S_b \\ M_b \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} U_a \\ U_a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} u_a \\ v_a \\ \theta_a \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} U_b \\ U_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} u_b \\ v_b \\ \theta_b \end{bmatrix}$$

新たに荷重が載荷され、構造が変形した後は、部材力部材端変位は、それぞれ、 $U_a^d - U_a, U_b^d + U_b, U_a^s + U_a, U_b^s + U_b$ に変化したものとする。

このとき、構造物の各部材の変形は、弾性範囲内であるとし、各部材については、重ね合せが可能であるとすると、1式の関係が変形後の状態でも成立していると考えることが出来る。

$$\begin{bmatrix} \overline{u}_a^d + \overline{u}_a \\ \overline{u}_b^d + \overline{u}_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_{aa} & k_{ab} \\ k_{ba} & k_{bb} \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} u_a^d + u_a \\ u_b^d + u_b \end{bmatrix} \quad \text{----- 2.}$$

②部材力及び部材端変位の変換

まず、先行荷重状態に対して、O-uvw系とO-xyz系との部材力及び部材端変位の変換は、次の如くである。

$$\begin{bmatrix} X_a^d \\ X_b^d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C^d & \\ & C^d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \overline{u}_a^d \\ \overline{u}_b^d \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} u_a^d \\ u_b^d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C^{dT} & \\ & C^{dT} \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_a^d \\ x_b^d \end{bmatrix} \quad \text{----- 3, 4.}$$

ここに、 X_a^d, X_b^d は O-xyz 系方向の部材力をあらわすベクトルであり、 x_a^d, x_b^d は O-xyz 系方向の変位をあらわすベクトルである。

あらたに荷重が載荷された後では、

$$\begin{bmatrix} X_a^d + X_a \\ X_b^d + X_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C & \\ & C \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \overline{u}_a^d + \overline{u}_a \\ \overline{u}_b^d + \overline{u}_b \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} u_a^d + u_a \\ u_b^d + u_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C^T & \\ & C^T \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_a^d + x_a \\ x_b^d + x_b \end{bmatrix} \quad \text{----- 5, 6.}$$

ここに、 C は 変形後の O-uvw 系と O-xyz 系とのなす方向余弦をあらわす行列である。

これを、級数展開して、一次項のみを考えると

$$\begin{bmatrix} C & \\ & C \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C^{d1} & \\ & C^{d1} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} C^* & \\ & C^* \end{bmatrix} \quad \text{----- 7.}$$

とあらわすことが出来るから、この関係を 5, 6 式に代入し、又 2, 5, 6 式より O-xyz 系に関する部材力と部材端変位の関係を求めることが出来る。先行荷重状態の関係式を用いて、整理すると、次の如くあらわされる。

$$\begin{bmatrix} X_a \\ X_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} k_{aa}^d & k_{ab}^d \\ k_{ba}^d & k_{bb}^d \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} x_a \\ x_b \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} R_a \\ R_b \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \xi \\ \eta \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} S_a \\ S_b \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \xi \\ \eta \end{bmatrix} \quad \text{----- 8.}$$

$$\begin{bmatrix} k_{aa}^d & k_{ab}^d \\ k_{ba}^d & k_{bb}^d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C^d & \\ & C^d \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} k_{aa}^d & k_{ab}^d \\ k_{ba}^d & k_{bb}^d \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} C^{dT1} & \\ & C^{dT1} \end{bmatrix}$$

ここに ξ は部材の相対変位をあらわすベクトルであり、節点の変位及び形状行列を用いて次の如く、あらわされる。

$$\begin{bmatrix} \xi \\ \eta \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \beta^T - \alpha^T \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} \quad \text{----- 9.}$$

③ 解 式

構造物の各節点における部材力はつりあいを保たねばならない。形状行列を用いて

$$[\alpha \ \beta] \cdot \begin{bmatrix} X_a \\ X_b \end{bmatrix} = [P] \quad \text{----- 10.}$$

P は外力をあらわすベクトルである。

構造物の各部材端の変位は、各節点の変位に等しい。形状行列を用いて

$$\begin{bmatrix} X_a \\ X_b \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha^T \\ \beta^T \end{bmatrix} \cdot [X] \quad \text{----- 11.}$$

以上により解式は次の如く整理することが出来る。

$$[\alpha \ \beta] \left(\begin{bmatrix} K_{aa}^d & K_{ab}^d \\ K_{ba}^d & K_{bb}^d \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -K_a^* & K_a^* \\ -K_b^* & K_b^* \end{bmatrix} \right) \begin{bmatrix} \alpha^T \\ \beta^T \end{bmatrix} \cdot [X] = [P] \quad \text{----- 12.}$$

ここに、 $K_{aa}^d, K_{ab}^d, K_{ba}^d, K_{bb}^d$ は通常用いられている stiffness matrix であり、第2項は次の如くである。

$$\begin{bmatrix} -K_a^* & K_a^* \\ -K_b^* & K_b^* \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} -Q_{XS}^F - Q_{XR}^F & -Q_{XS}^Z - Q_{XR}^Z & 0 & Q_{XS}^F + Q_{XR}^F & Q_{XS}^Z + Q_{XR}^Z & 0 \\ -Q_{YS}^F - Q_{YR}^F & -Q_{YS}^Z - Q_{YR}^Z & 0 & Q_{YS}^F + Q_{YR}^F & Q_{YS}^Z + Q_{YR}^Z & 0 \\ -M_{ZR}^F & -M_{ZR}^Z & 0 & M_{ZR}^F & M_{ZR}^Z & 0 \\ \hline Q_{XS}^F + Q_{XR}^F & Q_{XS}^Z + Q_{XR}^Z & 0 & -Q_{XS}^F - Q_{XR}^F & -Q_{XS}^Z - Q_{XR}^Z & 0 \\ Q_{YS}^F + Q_{YR}^F & Q_{YS}^Z + Q_{YR}^Z & 0 & -Q_{YS}^F - Q_{YR}^F & -Q_{YS}^Z - Q_{YR}^Z & 0 \\ -M_{ZR}^F & -M_{ZR}^Z & 0 & M_{ZR}^F & M_{ZR}^Z & 0 \end{bmatrix}$$

$$Q_{XS}^F = \frac{C_y^d}{\ell} (C_y^d N_a^d + C_x^d S_a^d), \quad Q_{XS}^Z = -\frac{C_x^d}{\ell} (C_y^d N_a^d + C_x^d S_a^d)$$

$$Q_{XR}^F = \frac{C_y^d}{\ell} (C_y^d L_a^d + C_x^d T_a^d), \quad Q_{XR}^Z = -\frac{C_x^d}{\ell} (C_y^d L_a^d + C_x^d T_a^d)$$

$$Q_{YS}^F = -\frac{C_x^d}{\ell} (C_x^d N_a^d - C_y^d S_a^d), \quad Q_{YS}^Z = \frac{C_y^d}{\ell} (C_x^d N_a^d - C_y^d S_a^d)$$

$$Q_{YR}^F = -\frac{C_x^d}{\ell} (C_x^d L_a^d - C_y^d T_a^d), \quad Q_{YR}^Z = \frac{C_y^d}{\ell} (C_x^d L_a^d - C_y^d T_a^d)$$

$$M_{ZR}^F = -\frac{C_y^d}{2} L_a^d, \quad M_{ZR}^Z = \frac{C_x^d}{2} L_a^d$$

$$N_a^d = \frac{EA}{\ell} (U_a^d - U_b^d), \quad S_a^d = \frac{12EI}{\ell^3} (v_a^d - v_b^d) + \frac{6EI}{\ell^2} (\theta_a^d + \theta_b^d)$$

$$L_a^d = -\frac{12EI}{\ell^3} (U_a^d - U_b^d), \quad T_a^d = -\frac{6EI}{\ell^2} (v_a^d - v_b^d)$$

Saafan, S. A : Theoretical Analysis of Suspension Bridges, pro. ASCE Vol 192 ST, Aug. 1966

藤野 大坂憲二：有限変位理論による構造解析 第21回土木学会年次学術講演会

Przemieniecki : Theory of Matrix Structural Analysis : Mc-Graw Hill

解式 12 式は

$$[x^{(n)}] = ([K_0] + [K(x^{(n-1)})])^{-1} [P]$$

とあらわされるから、これを用いて
くり返し試算を行えばよい。

又、あらたに載荷される荷重が小さい場合には

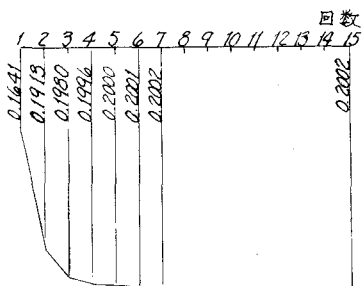
$$[x] = ([K_0] + [K(x^d)])^{-1} [P]$$

として線型化することが出来る。

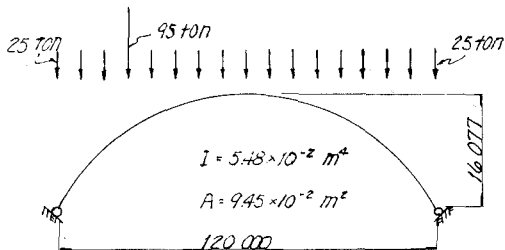
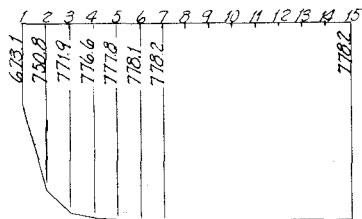
3. 計算例

径間 120m のアーチ橋に対して
変位、曲げモーメント、軸力の計
算例及び、くり返し式算の回数
に対する収束状態を示す。

収束状態 (DEFLECTION)



収束状態 (MOMENT)



— 変形を考えた理論

— 微小変形理論

